

Nueva España : *Cronica del Siglo XVII* (Guadalajara, Jal.: Imprenta "GRAFICA", 1950) ② *Relaciones Geográficas del Siglo XVII: Michoacán* (México : Universidad Autónoma de México, 1987) ③ 註記の史料 ④ Diego Basalengué, O.S.A., *Historia de la Provincia de San Nicolás de Tolentino de Michoacán, de la Orden de N.P.S. Agustín* (México: Tip. Barbedillo y Comp. 1886) ⑤ "Demarcación y Descripción de El Obispado de Michoacán y Fundación de su Iglesia Catedral en Biblioteca Americana, Vol.1, No.1 (1982) pp.60-204" ⑥ *El Obispado de Michoacán en el Siglo XVII* (Morelia, Mich.: Fimax Publicistas 1973) ⑦ Alonso de La Rea, O.F.M., *Cronica de la Orden de N. Sordifco P.S. Francisco, Provincia de San Pedro y San Pablo de Michoacán en la Nueva España* (México: Imprenta de J.R. Barbedillo, 1882)

- ⑧ 註記の史料 ⑨ Matias de Escobar, O.S.A., *Americana Thebaida* (Morelia, Mich.: Balsal Editores, 1970) ⑩ Isidro Felix de Espinosa, O.F.M., *Cronica de la Provincia Franciscana de los Apóstoles San Pedro y San Pablo de Michoacán* (México: Editorial Santiago 1945) ⑪ *Inspección Ocular* (México: Editorial Jus, 1960) ⑫ キンコ園林公文書館 Ramo Hospital, Vol. 28, Exp.10, fols. 245-334⁴。以下に⑬ 史料¹¹を用いし参照す。
- (15) 史料¹¹, p.27
 (16) 史料¹¹, p.68
 (17) 史料¹¹, pp.302, 303, 368
 (18) 史料¹¹
 (19) 史料¹¹, pp. 20, 21
 (20) 史料¹¹, pp. 141-143
 (21) Charles Gibson, *Los aztecas bajo el dominio español* (México: Siglo Veintiuno Editores, 1986 / 初版 Stanford, California, 1964) p. 130
 (22) 史料¹¹ ①

- (23) 史料¹¹ 10
 (24) George M. Foster, *Trinitzmizcan* (México: Fondo de Cultura Económica, 1976 / 初版 Boston: 1967) pp. 192-208
 (25) 筆者が一九九〇年二月に行つた調査に基づき作成した概略図で、縮尺は一定せず。
 (26) 初代副王メンマサ (一五三五—一五五〇) により王立病院に指定された。
 (27) 史料¹¹ fols. 313-313v.

「低湿地文化論」その可能性と課題

— 河岡武春の方法論とその展望について —

菅 豊

1. はじめに

「低湿地」とは、簡単に文字通りの「低くて、湿気が多い土地」と言うことができよう。これは、排水可能な基準面に対する土地の相対的な高度と、それと大きく関わる土地の湿度、そしてその環境の全体的な現象を形容する言葉である。この言葉を使用する時には、多様な自然姿態の中から、ある種の特徴を持つ空間を画定する意図が存在していることは間違いない。そして、「低湿地文化論」と言った場合には、意図的に画定された空間の文化論的検証を目指すものと言うことができる。

「低湿地」というと地形的には特殊なものと思われがちで、現代人の生活には比較的馴染みが浅い。しかし、「低湿地」の語を

用いて、積極的にその空間の地理学的分析を行った籠瀬良明は、何か特別のひびきのある「低湿地」が、実際はどこにでもありとあった種類の土地であるとし、日本国土全体に横たわる「低湿地」の面積は莫大で、広い領域性を持つことを指摘している⁽¹⁾。文化論を展開する一つの方法として、環境の特性に注目し、それをメルクマールとして複雑に絡まりあつた文化の束を解きほぐす作業がなされてきたが、籠瀬の言葉に従うならば「低湿地」は汎日本的なものであり、日本文化を理解する一つの指標足りうる。しかし、それとの現代的隔絶感のためか、従来のこの空間に関する研究はほとんど行われて来なかつた。また行われたとしても、「低湿地」に生活する人々は水に脅かされそこでの暮らしを余儀なくされているという、否定的な見解が主流を占めていた。だがこれは、あくまで陸の側から眺めとらえた「低湿地」への消極的な視点であり、

その視野は狭隘であると言わざるをえない。「低湿地」のずっと先に広がる水面をも見わたす視点が、あるいは水の方から見た視点というものが真の「低湿地」を理解するためには絶対不可欠なのである。本稿では、「低湿地」で積極的に生活した人々がいるという観点に立って、「低湿地文化論」を読み直し、仮説の生起した背景や問題点、具体的な内容を検討する。

この「低湿地文化論」という仮説が、民俗学界の中で頓に取り上げられ、十分に論議されたことはない。最初に、筆者は「低湿地文化論」の知名度、波及度の低さを指摘するものである。

しかし、このような状況がこの仮説の正当性にいささかの瑕疵をも与えないことは言うまでもない。ただ、純粋なる一人の唱道者が、その業の途次にて急逝したことが、仮説の十分な検証を困難たらしめているという実状を痛感するのみである。

二、河岡武春と「低湿地文化論」

「低湿地文化論」の唱道者は紛れもなく河岡武春である。

河岡は海民の独自の生活と文化を解明した研究者として夙に知られている。⁽²⁾ 同氏は広島文理科大学在学中より、渋沢敬三、宮本常一らに師事し、国史学を専攻する一方でその関心は民俗学へと注がれていた。雑誌「民間伝承」に、在学中既に数篇の論稿を登

表していることから、民俗学への関心の深さを推し測ることができよう。⁽³⁾ 特に、昭和二六年に発表された「能地漁民の展開」⁽⁴⁾は、遍歴、漂泊する漁民集団の実生活についての卓見であり、柳田國男をはじめ多くの人々の注目を集めたとともに、自分自身の研究の機軸をなした。

そして、昭和六一年十月五日に五十九年間の人生に終止符を打つまで、漁民、漁村、漁業の研究と合わせて、絵巻物、民具、山村(特に林業)研究に精力的に手を染め、渋沢敬三の偉業を継承、発展してきた。

多くの業績を持つ河岡だが、その興味を中心に「海の民」の問題を見据えていたことについては異論のないところであろう。そして、本稿で取り扱う「低湿地文化論」も、その「海の民」研究の延長線上にあったことはほまちがいない。

河岡武春は「農漁民あるいは漁農民といった漁業をする農民の問題」(すなわち「低湿地文化論」)を考えるようになったのは、昭和四八年からであるとして⁽⁵⁾いる。また、「低湿地文化論」に関する具体的な論稿は、昭和五〇年代初頭に集中しており、彼の研究歴の中では比較的遅い時期に位置付けられる。

しかし、この論の着想自体はもう少し早い時期、昭和四三年頃と考えられる。これは東南アジア民俗調査をきっかけとしたものであり、当地における見聞をもって「低湿地文化論」の端緒をなしている。だが、当時発表された東南アジアに関する諸論稿⁽⁶⁾では、

「低湿地文化論」についての具体的立論はほとんど行われておらず、それに対する展望もあまり読み取ることはできない。むしろこの論は、東南アジア見聞後の日本の調査を行う過程において醸成されたもので、七七八年の歳月を経て、一つのイメージに到達したものと考えられる。ただし、彼にはその後、東南アジアにおける「低湿地」の印象と、日本の「低湿地」に対する関心を相対化させる視点が常々あったことはまちがいない。

河岡は、昭和五〇年代初頭に矢継ぎ早に出した「低湿地文化論」に関する論文以降、論を発展させる大きな業績はこれといって残していない。では、「低湿地文化論」とは河岡にとって一過性の研究課題であったのであろうか。この問いに対しては、否と明言するしかない。この論が、彼の研究初期の「海の民」の問題と通底している点、あるいは方法的に彼が開花させた民具学という物質文化への視点をふんだんに盛りこんでいる点から鑑みて、研究者の一時の手慰みでなかったことは明らかである。また、精力的にこの論と取り組んでいた結果、彼の周辺に集まった人々に少なからず影響を与えていたのである。⁽⁷⁾ 「低湿地文化論」は河岡にとってライフワークともいふべき所産であった。小島櫻禮は河岡の追悼集に寄せた「海人の低地稲作開発」という小文の中で次のように述べている。

二年前(昭和六〇年頃)と考えられる引用者注)の十月

末、河岡武春先生にお会いしたとき、「そろそろライフワークをおまとめにならない」と申しあげると、先生は「低湿地の農業と漁民との関係を書きたい」とおっしゃっていた。私にとってはこれが先生の遺言になってしまった。

海に近い低地に開けた水田の経営と漁業とのかかわりについては、十数年来、いくどとなく先生の話をお聞きしていた。農民と漁民という一見矛盾した対立概念が水田稲作で一体化するという見方は、まったく独創的な発想の転換であった。日本の古代国家の形成の背景に、稲作の発達があったことは、歴史的にも構造的にもまず疑いない。それは稲が生産性のきわめて高い穀物であること、従来不毛の地であった低湿地が広い水田として農地に利用できるようになることなど、生産力において一種の産業革命であったと考えられるからである。先生はその革命を支えた労働力の問題を考えていたのである。

低地はもともと漁民の生活の場であった。海があり、潟があり、川がある。そこで稲作を始めるのに適わしいのは漁民である。東南アジアの旅で、稲田の中の用水が漁場になっているのを見つけた話もお聞きした。中古以来、漁民の長を指した村君が、上代の文学では水田開発者の長の称になっていることも話題にした記憶がある。

先生の「山国の海部たち」には、海人を統率する安曇氏が

信濃へ移住して水田を開いた様子が描かれ、北欧のヴァイキングの活動と類比されている。先生は文献史学の素養を生かし、歴史的に人間を認識する考証学としての民俗学の方法を歴史の世界で駆使できる、数少ない民俗学者の一人であった。残された問題の大きさをあらためて痛感している。⁽⁸⁾

③生計活動の複合性と物質文化による「低湿地」の理解
「低湿地」において農耕、漁撈、鳥獣、採集などの生計活動が複合的に営まれていることに注目した。そして、その複合性を物質文化を通して体系化しようとした。

三、「低湿地」という空間の画定

「低湿地文化論」は河岡の研究を統合するものであり、熟練した玄人の研究者の一大金字塔となるべきものであった。しかし、その論の構築者の死によって、尤なる文化論として完成されることのないまま、その検証を後世へと委ねることとなったのである。「低湿地文化論」の特徴および性格は以下の三点に集約できる。

河岡武春は「低湿地」という語を使用し、特定の空間を日本の多様な自然の姿態の中から浮かび上がらせるという手法をとっている。このような手法は、従来の民俗学においてはそれほど頻繁には用いられてこなかった。

①「低湿地」という空間の画定
「低湿地」という特徴的な景観を一つの空間として画定し、それを文化論の中で理解しようとした。

②「低湿地」の南方系海人による開発
「低湿地」の開発の問題を考え、開発の担い手を漁民、あるいは南方系の海人に指定していた。そして、この論の展開にあたっては東南アジアの見聞が端緒となり、常に日本の現象と相対化した。

脈の中から探らなければならない。

河岡が「低湿地文化論」を意識したうえで「低湿地」の語を用いたのは、筆者の管見の限りにおいて「渋沢敏三と笠と足半」という論文が最初である。そこでは「……日本の海辺のかんりの地域では、徳川中期以前にあつては湖沼、河川と海の連なっている

述をしているが、実際の研究の対象としては取り扱っていない。福島潟、鳥屋野潟の「低湿地文化」について論ずる中で、考古資料を多く援用し、古き時代には内陸砂丘、自然堤防上に海を伝って「低湿地」に適応しようとする人々が入ってきて、そこに集落を造りあげたとしている。河岡のとらえる内陸砂丘は「……昔はそこまでが海岸線であつたわけですが、次第に海岸線が後退して砂丘ができた」とする地形であり、自然堤防は「海岸線には平行してな

低湿地が少なくなかつた……」⁽⁹⁾（傍点引用者）と述べられている。これからして、まず河岡が「低湿地」に対して湖沼、河川（特に河口部）に付随し、広く日本沿海部に分布していたものとしてイメージしていたことがわかる。また、この後「低湿地文化」について叙説するにあたって、新潟県蒲原平野の福島潟、鳥屋野潟⁽¹⁰⁾、石川県小松市の今江潟⁽¹¹⁾、島根県中海、宍道湖、千葉県手賀沼⁽¹²⁾、滋賀県琵琶湖⁽¹³⁾、岐阜・愛知県の木曾川、長良川、揖斐川流域など比較的平野部で、海に繋がる地方が考察されたことから、山間の低湿な土地がとりあえず除外され、低高度平野部の低湿な土地が観点の中心に据えられていたと見ることができ。当然、山間部においても排水基面より低い平坦地には湿性の土地が形成されるわけで、このような空間は「低湿地文化論」では考慮の範疇に含有されていないわけだ。

「低湿地文化論」その可能性と課題

この点について河岡は「低湿地文化ノート」という論稿の中で、早川孝太郎著「山と農業」に見られる水田立地論をもつて、「早川さんは多くの内陸部の「漸次乾枯し」た泥沢相を（水田が最初に立地したところとして…引用者注）考えておられるように論文は読みとれるが、そうした地域だけでなく、私はもっと低湿地を広くとって考えたく思っている。つまり、もっと漁業（大小さまざまあるが）ができ、舟行を必要とする低湿地にも初期稲作が行える場があつたとする立場をとっている」とし、「低湿地」という概念があたかも山間部の高地性のものも含むかのときも拡大記

このように「低湿地文化論」で論じられる「低湿地」が海洋的な文化の影響を受ける空間であることは理解に難くない。そして、これは「低湿地文化」を考える上で河岡自身の関心が強く海の方へ向かっていたことを示している。

では「低湿地」の具体的な環境とはいかなるものか。彼は琵琶湖堅田付近の景観をもとに、「低湿地」の自然相を具体的に描いている。

……湖に注ぐ小川には田舟が浮び、すぐ近くに□⁽¹⁴⁾と思われれるヨシズの間が見え、附近には野菖蒲が咲きみだれ……川岸には柳が若葉をつけて岸辺に立っている。これは典型的

な低湿地の風景である。……家の回りに屋敷林があり、その外側は池になっている。池といっても屋敷地を地上げをし、また掘った泥を積み重ねて水田をつくっているもので、その掘り跡が池になったのである。池には田舟を浮べ、主人らしき男が水棹を漕いでいる。そして池の一角に魼のような生簀のような、長い杭の列に囲いを張ったような施設が見える。この池は横堀（かまえばり）より無数の水路に通じ、家の玄関より田舟に乗って目的地に行ける……住宅が掘りつぶれの中にあるように、水田もまた輪中地帯にあっては、多すぎる水の中、すなわちクリーク状の短冊形の池沼（堀潰れ）の間に積み上げられた高い耕地としてあり……堀潰れと交互に美しい幾何学的なシマ模様を描いている。⁽¹⁹⁾

この「低湿地」の風景についての記述は、少々叙情的な表現の嫌いはあるが、河岡の具体的な「低湿地」に対するイメージを読み取ることができる。土壤については、泥炭質の常時冠水しているか、あるいは排水不良の湿性ものを想定していた。そしてその土壤に連関してヨシ、マコモ、ヒシ、ガマなどの植生や、浮き稲という栽培植物を指標とした。これらの点は土壤学、地質学、生物学などの様々な分野の狭間で研究されてきた「低湿地」のメルクマールと大差はない。しかし、河岡が文化論で取り扱う際の「低湿地」とは土壤学、地質学、生物学の対象とする局所的な空間

はない。しかし、両者共に他方の論の影響を示す言説が見られない。一方の論の存在すら言及されていない。これは両論の本旨が直接抵触するものではなかったことや、論の発表の場がそれぞれわずかにずれていたことがその理由と考えられる。⁽²¹⁾

「照葉樹林文化論」が植物学、生態学、作物学などの裏付けデータを持つ「いわゆる境界領域に成立した新しい学説」⁽²²⁾であり、日本文化起源論として一世を風靡したのに対し、片や「低湿地文化論」は実証的な検証なしに埋没された論説である。また「照葉樹林文化論」では、指標植物によって類似の文化の分布する文化領域を画定しているのに対し、「低湿地文化論」では断片的に空間を取り上げているにすぎず、その総合と共に文化領域設定の作業は実際には行われていない。この点が「低湿地文化論」が文化論として真に確立されなかった原因であろう。

しかし、河岡が「蒲原の…引用者注」⁽²³⁾低湿地を拓いた根元を南方系の漁民系農民と考えたい」と述べているように、「低湿地文化論」は単に局地的、個別的な課題として集められたのではなく、文化の伝播、分布という課題に最終的に収斂させることが企図されていたと考えるべきであろう。したがって、文化論として確立されるためには、現在の「低湿地文化論」の個別的、分節的な資料を総合する作業が充実されねばならない。また、逆説的に「低湿地」という空間が文化論を構築する指標として、適しているか否かをも検証する必要がある。現時点では、「低湿地文化論」

間を指すのではなく、そこを中心としたもう少し大きな空間が考えられていた。すなわち低湿な土地を中心として、その先にある水面―湖、沼、池、潟などと、手前にある陸地―自然堤防、内陸砂丘、台地など―とを含めたものを全体的な空間として「低湿地文化論」の中で画定していたのである。水面には魚類、鳥類が多く棲息し、人々はこれを獲得する。そして陸地では低い所での稲作中心の農耕が行われることに注目し、また、これも「低湿地文化」の重要な指標としたのである。

この空間は一つの生活空間と言っても良く、この生活空間を特徴付けるものが低湿な土地であり、低湿な環境を中心として営まれる生活の体系⁽²⁴⁾が「低湿地文化論」の主眼であったと言えよう。

これと同様に自然の特性に注目して構築された文化論として「照葉樹林文化論」がある。この論は簡単に言って「照葉樹林」という自然の特性を中心として展開される人間の生活体系を把握したものである。「照葉樹林文化論」として人口に膾炙した学説であるが、これと「低湿地文化論」を対照させることは非常に興味深い。

「照葉樹林」も「低湿地」も自然の一つの姿態であり、それを共に文化論に冠したあたりなど、両者の方法の関連性を類推させるものがある。また、両論とも昭和四〇年代初頭から五〇年代初頭にかけて着想、発展させられてほぼ同時期に研究が進められている点からしても、両者に何らかの関連性を予想することは難しく

における空間の画定は未成熟であると言わざるをえない。

四、「低湿地」の南方系海人による開発

河岡武春が「低湿地」を海との関連で画定したことは先にも触れたが、では河岡はいったい何故このような海への指向性をもって作業を進めたのであろうか。

この答えは至って明瞭で、河岡が「低湿地」の開発やそこへの人々の定着に関して、海人、あるいは海民の関与を想定したためであると考える。

彼は「低湿地」という「田圃を拓くのひじょうに具合の悪い、悪条件のところに、なぜ人が住んだか」という問題に関して次のように考えている。

……しかし、そういった（徳川中期の…引用者注）開田の前には、そうした地域には人が住まなかったか、あるいは集落らしいものは全くなかったかということになると、私は現在と近い形ではないけれども、そこには人は住んでいたと思いたいわけです。ですから、水田に開く以前に、あるいは現在にやや近い水田を開く前に、もっと違った利用をする人たちが、その周辺に住んでいたのではないか。それは必ずし

も今日いう意味の定着的な住いの仕方、集落の構成ではなく、一カ所にしばりつけられるような生活の仕方ではない、かなり自由に移動をする、それには生活の場が広く要りますが、そんな在り方を想定してみてもどうだろうかと思えるわけだ。

このような考えに立つと、先ほど来、申したような非常に困難な開拓条件の中で、一人水田化に成功しても、それが水に流される危険が多く、良い水田を維持していくことが出来難いわけだ。そういう所に人が住むということは、水田稲作の方から考えると条件が悪いけれども、そうではなくして、もっとほかの方から、そこが生活の場に適して、ある好条件があるから人が住んだと考えると、漁業だとか、鳥をとったりする狩猟だとか、その両者を生計の基礎にする考え方もなっています。つまり、低湿地帯というものは、必ずしも全面的に悪い条件ではなく、そういう所に積極的に好んで人が住んだということも、これからはもっと考えなくてはならぬと思うわけです。⁽²⁵⁾

このように河岡は、古い時代の「低湿地」の開拓が稲作以外にも漁業や狩猟を生計の基礎においた人々によってなされたことを指摘している。これらの人々については、彼は「農漁民」あるいは「農漁民」という表現をとることもある。そして、そのような

「低湿地」の開拓者は「南の方から……船を使って海から内陸に入って移動してやって来た」とし、「低湿地」を拓いた根源を南方系の「漁民系農民」と位置付けている。

この考え方は、海人・海民の陸化・定着の研究の流れの中で理解されるもので、河岡も当然従来米の研究の成果を踏まえたうえで「低湿地」への海人・海民の定着を考えた。しかし、それは羽原又吉言うところの專業的漁撈民が定着過程において、環境に適応し農民化したというような転換⁽²⁶⁾ではなく、根本的に両者の性格を具備した人々の到来こそが想定されていたのである。

河岡は「低湿地」を海人・海民が定着し陸化する「窓」の空間としてとらえていたのであり、その空間の研究は彼が一貫してやってきた「海の民」の独自の文化と生活の追及の延長線上に位置付けることができる。そしてこの考えが、東南アジアのフィールド・ワークにおける見聞を端緒としていることはほぼ間違いない。

昭和四三年九月。河岡は東南アジアへ民具調査の旅へと赴いた。この時は主としてマラヤ（マレーシア）、タイの漁村が調査され、特にタイ南部のソンクラ県では漁村生活用具一三〇点が収集されている。また、そのほかカンボジア、シンガポール、マカオ、香港、台湾の農漁村も訪れている。

この約四か月間にわたる東南アジアの調査経験が、河岡の「低湿地文化論」に大きな影響を与えた。彼は帰国後、この調査の成

果を「マラヤ漁村に於ける民具」⁽²⁸⁾、「マラヤ太陽の下の陽気な旅」⁽²⁸⁾「マレー漁村と民具」などにまとめているが、これらには「低湿地文化論」に関する具体的な構想、展望というものはほとんど述べられていない。しかし、七年後に著された「低湿地文化と民具」⁽²⁹⁾という「低湿地文化論」について最も詳しく書かれた論稿の中

では「低湿地文化」の説明に東南アジアでの見聞を多く援用している。この中で「カンボジアの場合には、低湿地文化を考えるのに最上のフィールド⁽³⁰⁾として、クメール人系統の人々の生活に特に注目していた。河岡は「クメール人は魚と米が主食で、どちらが不漁、不作でも大問題になる困窮です……このクメールの一部の農民たちが、二月から五月にかけて、村単位で先程いった湖沼地帯（メコン川流域…引用者注）に移動して、三ヶ月の間、浮き稲を栽培しております。船で浮き稲を作りながら、漁撈活動もするという生活形態をとっていますが、これは大変面白い問題だと思います⁽³¹⁾」とし、日本の「低湿地」に生きる人々の生活形態の類似を示唆している。これは、単に日本と東南アジアの「低湿地」における生活の構造的な類似のみならず、両地域の「低湿地文化」が何らかの共通の脈絡を有している点を暗に仄めかしている。

先に日本の「低湿地」の開拓が「農漁民」あるいは「漁農民」の性格を持つ外来者によって行われたとする河岡の見解を指摘したが、この外来者こそ、ほかでもない東南アジアの「農漁民」と

河岡はとらえていたのである⁽³²⁾。その実証は明らかに不十分ながらも、「低湿地文化論」を東アジアという大きな領域の中で理解しようとする、河岡の文化論構築に対する並々ならぬ意欲が読み取れるのである。

河岡は東アジアの「低湿地文化」の共通性、類似性を示唆するに留まっているが、いずれにせよ「低湿地文化論」における南方への視点は、この論の要目であるとともに、論の誕生のきっかけとなった。

五、生計活動の複合性と物質文化による「低湿地」の理解

河岡は「低湿地帯にすぎなく住んだとか、そういう消極的でなく、積極的にそこを生活の場として、ふさわしい所だからそこを選んだのだ」ということが、低湿地文化とは何かという話の主題になる⁽³³⁾とし、また何故「そうした（低湿地）…引用者注」⁽³⁴⁾貧村地帯に人は住んだのであろうかと問題を提起している。そして、この問題に具体的な解答を見出すためには、「農業中心の現在の考え方から自己を解放しなければならない⁽³⁵⁾」とまで言い切り、民俗学に往々にしてあった一元的な視点に批判を加えている。

つまり、現在の農業（特に稲作）主体の観点から言えば「低

湿地」という空間は、稲作には不適であり生活環境としては悪条件のそろっているところと一般的に見做されやすいが、そのような空間は稲作以外の漁撈、狩猟、採集などにも多方面に生活の基盤を委ねる人々にとっては、まさに最良の空間と言える。河岡は考えていたのである。この生計活動の複合性に対する視点こそが河岡をして「低湿地」の人々を「農漁民」あるいは「漁農民」と表現せしめた。

このような農耕、漁撈、狩猟、自然採集の活動の位相を複合的にとる視点は、当時の民俗研究には不足していた。人間を「農民」「漁民」、そしてそれらの居住する社会、空間を「農村」「漁村」と安易に分別し、そこに生じた民俗を「農村の民俗」あるいは「漁村の民俗」などとアブリオリに認識してきた民俗学の態度に、疑問を投げかけるものである。

河岡は農耕と漁撈、そして漁撈と狩猟（鳥獣）の連関について特に注目している。まず農耕と漁撈の連関については「浮き稲」をキーワードとして論を展開している。日本の「低湿地」に存在する、水位の変動により浮沈したり、流失したりする「浮き田」の農法に着目し、これに用いられる稲の品種が水位上昇とともに芯の伸びる「浮き稲」の系統にあることに触れ、同様の「浮き稲」栽培を行っている東南アジアではこれが漁民的な農業であること指摘している。然して、日本の「低湿地」の農耕も漁民的性格を持つものとされているのである。

河岡は石川県今江潟周辺の雁釣猟について「これなどは漁業と狩猟の未分化の猟法である」⁽³⁹⁾などと述べ、また千葉県手賀沼のモ子縄猟も「いわゆる漁業未分化の方法で行なわれていた」とし、漁撈と鳥獣が「低湿地」においてセットとして営まれ、その方法が形態、構造の面で酷似している点を強調している。だがこのような考え方も渋沢の次のような言葉が発端となっていることはほぼ間違いない。

内水面では漁民が同時に鳥獣を行っている。ナガシモチで主としてカモをとっているが、鶺鴒などもとって他の鶺鴒の行われた地方にこれを出している。漁業、鳥獣、未分化の時代を共有した宮本常一⁽⁴²⁾や網野善彦⁽⁴³⁾らにも同様の言説が見られることは非常に興味深い。

河岡は「低湿地文化論」におけるこの生計活動の複合性を、物質文化を通して体系的にとらえようとしている。彼は「低湿地文化」について論じる中で、そこに残存する特徴的な民具を細かくとりあげ、その使用法について解説している。⁽⁴⁴⁾この民具を切り口

個別的には新潟県蒲原平野の「低湿地」を考へる中で「ノマ（潟のこと…引用者注）への稲作には田舟でない舟が必要で、廻ると漁民系農民の開拓によると私には思えます。例えばこうした深いノマなどは漁業とも関係があかぬ⁽³⁶⁾」⁽³⁶⁾なっている点を考慮し、農耕と漁撈が同一空間で同一の人々によって営まれてきた状況を解説している。

また、笠など小規模な漁撈を営む農民も、漁業をする農民として包摂していく姿勢を見せているが、これは彼の恩師の一人渋沢敬三の示唆によるものでもあった。河岡は以下のような渋沢の文章を幾度となく引用している。

小さい漁業としては、百姓が笠やブツタイのようなもので泥鰌などを獲って居る漁業もある。それは如何にも小さく、まとまって居らぬので下らない漁業のようでありませうけれども、日本全體から見ると馬鹿に出来ない。この笠というものが日本全體に何百萬何千萬個あるか分らない。従ってこのウケに依つて採取されて居る所の塩というものは統計には出て来ないが、非常に莫大なものの上るのかも知れない。⁽³⁸⁾

この言葉は立論の段階において河岡に少なからぬ自信を与えたものと思われる。また、漁撈と狩猟の連関の仮説についても渋沢の影響を読み取ることができる。

として「低湿地」を眺めるといふ方法は、河岡の「低湿地文化論」で終始貫かれた手法と言つても過言ではない。

河岡の民具への関心は「海の民」への関心などと並んで、彼の研究の中核をなすものであった。「海の民」研究の延長線上に「低湿地文化論」が位置付けられることは先にも指摘したが、ここでまた彼を惹きつけて離さなかつた民具研究が、「低湿地文化論」の理解の方法として用いられている点は熟慮されねばならない。

河岡が民具に関心を持ち始めたのは、昭和三〇年代末から四〇年代初頭の頃である。⁽⁴⁵⁾しかし、民具研究に対する意欲が持たれてから、実際に「直接民具の収集、調査を経験したのは、おかしなことは日本ではなく、東南アジアにおいてで、四十三年四月から約四カ月の旅であった」と河岡は述べている。そして、この東南アジアの旅こそが「低湿地文化論」の誕生の契機となり、その後の論の形成に多大なる影響を及ぼしていた点は注目に値する。つまり、河岡の「低湿地文化論」と「民具論」は、その出発を同一にし、以降並行して熟成された「対象」と「方法」の関係であったと言える。この「対象」については、現在は轆轤不遇の身に甘んじているわけだが、一方「方法」は多くの研究者に啓蒙的な役割を果し、今日の民具研究の隆昌に大きく寄与したことは誰しも認めるところであろう。

しかし、「物質文化」偏重とも言える河岡の姿勢は、自ずと信仰、儀礼といった別のレヴェルの対象物への接近、取り組みといった

ものを手薄にしており、「低湿地文化論」の現状での限界となっている。

六、結 語

以上、河岡武春の「低湿地文化論」の足跡を追いつつ、その論旨と課題について検討した。「低湿地文化論」は未完の文化論である。したがって、その絶対的な評価は現時点では不可能である。筆者は、今後この論の検証作業を継続するつもりであるが、最後に当面筆者の考えている「低湿地文化論」の可能性について若干述べて結語にかえたい。

まず、筆者が考えているのは、人々の前に広がる「低湿地」とその先にある水面に対するイメージの問題である。千葉県手賀沼の場合、「低湿地」・沼の空間を「カワ」という名称で呼んでおり、生活の重要な舞台であった。また、滋賀県琵琶湖の専業漁師として有名な堅田漁師にとって、それは「ウミ」であり、生計を支える重要な空間である。鳥取県東郷湖では「イケ」の語をもってこれを語る。このように、単なる地名上の湖、沼などという名称にとらわれてはならない。そのためには今後より多くの実態例を収集し、その比較によって「低湿地文化」の本質を抽出すべきである。

「低湿地」に対するイメージはそこに住む人々の抱くイメージとともに、非居住者のイメージをも考えなければならぬ。これは、差別の問題と結び付いてくる。例えば広義の「低湿地」としてとらえることの可能な河原という空間に、かつて排除された周縁的な人々が居住し、差別的な扱いを受けていたことは夙に指摘される問題である。つまり、陸の側から見た「低湿地」には「負」のイメージが付与される場合があるのである。この問題を「低湿地文化論」の組上に載せ、慮げられた人々のイメージと空間のイメージを相関させることによって差別の問題を究明しなければならない。河岡の観点から言えば「低湿地」には居住者側の「正」のイメージが存在し、また非居住者側の「負」のイメージも存在することになる。この相対化は大きな課題である。

この問題と共に考えなければならないのは、「低湿地」に住む人々の持つ特権である。例えば、手賀沼では布瀬という集落が近隣のムラより「親浜」と呼ばれ、沼関係の特権を持っている。また、琵琶湖では堅田漁師は「親村」と呼ばれ、湖一帯の漁撈・舟運の権利を持つ。東郷湖畔の上浅津は、特別な名称を持たないけれども、ほかの周辺の近隣集落に比べて優越的な立場にあった。以上の三例のように、「低湿地」に立地するムラの中には「低湿地」やその先の水面で行う生計活動に特別の権利を持つムラが存在する場合もある。このようなムラの歴史的な承継がいかなるものか、まず考えなければならない。そして、この特権の問題は先に述べ

た差別の問題と相対的に論ぜられるべきであろう。これは「賤視」と「権威」の問題と言え換えられるかもしれない。

最終的に、筆者は「低湿地」に対するイメージというものから発展させて、「低湿地」に住む人々の価値観の問題にまで到達すべきだと考える。「低湿地」に居住する人々が「水の民」として生きる場合、土地所有などの認識が弱まるのではないか。一方、それに対立する「陸の民」として生きる場合、「陸の論理」によって土地所有の理念が高まるのではないか。そしてその両空間―水と陸―の接する所に生きる「水辺の民」として彼らがある場合、土地所有の理念とそれを否定する理念が同時に存在するのではないだろうか。この三者の関係をもって日本文化論を考えることは、決して無意味ではなからう。

このような理念的な問題に踏みこむには、まず「低湿地」に生活する人々の基本的な生計活動を把握せねばならない。しかし、近代化の進展した今日では「水辺の民」は、消滅してしまっただと言っても過言ではなく、その様相はとらえ難いものとなっている。現状にあって、遅きに失した嫌いも無きにしてもあらずだが、従来見落とされた「水辺の民」の生活を再構成する基本的作業の必要性を訴えずにはいられない。

謝 辞
本稿の作成にあたっては佐野賢治氏、窪田涼子氏、横井成行氏には多大なる御協力、御助言を賜った。ここであらためて同三氏の御学恩に対し深く御礼を述べる所である。

注

- (1) 龍南良明 「低湿地―その開発と変容―」 昭和47 古今書院 p.209
- (2) 網野善彦 「河岡武春氏の逝去を悼む」 『歴史と民俗』 2 昭和62 平凡社。
- (3) 河岡武春 「産話二つ」 『民間伝承』 14 1-6 昭和25。『鯨組の話』 『民間伝承』 15 1-1 昭和25。『名替まつり』 『民間伝承』 15 1-3 昭和26。
- (4) 河岡武春 「能地漁民の展開」 『民間伝承』 15 1-12 昭和26。
- (5) 河岡武春 「低湿地文化ノート―農漁民あるいは漁農民について―」 『近畿民具』 1 昭和52 p.3
- (6) 河岡武春 「椰子文化」 (1)。(2) 『民具マンスリー』 1 1-8、9 昭和43。『マラーヤ漁村に関する覚書』 『アジア経済』 10 1-5 昭和44。『マラーヤ太陽の下の陽気な旅―』 『あるくみるま』 28 昭和44。『マレー―漁村と民具』 『民族学研究』 34 1-2 昭和44。
- (7) 『追悼河岡武春先生』(神奈川大学日本常民文化研究所編 昭和62) の中で酒井和男、湯浅照弘、神野善治らは、河岡武春が「低湿地文化論」の究明を積極的に説いていた旨を述べている。
- (8) 小島環禮 「海人の低地稲作開発」 『追悼河岡武春先生』 神奈川大学日本常民文化研究所編 昭和62。
- (9) 河岡武春 「洪沢敬三と釜と足半」 『日本民俗学』 99 昭和50。
- (10) 河岡武春 「低湿地文化と民具」 (1)。(2) 『民具マンスリー』 9 1-3、4 昭和51。

- (11) 河岡武春 「漁民の水鳥獵」 『民具マンスリー』 10-4 昭和52
- (12) 河岡武春、勝部正郊 「中海宍道湖の漁具・漁法とその背景」 『民具マンスリー』 9-6 昭和51
- (13) 河岡武春 「手賀沼布瀬鴨猟小記」 『日本民具学会通信』 11 昭和51
- (14) 前掲書(5)。
- (15) 前掲書(5)。
- (16) 前掲書(5) p.4
- (17) 前掲書(10) ⑥(2) p.13
- (18) 前掲書(10) ⑥(2) p.13
- (19) 前掲書(5) p.2
- (20) 前掲書(10) ① p.3
- (21) 「照葉樹林文化論」が学界に華々しく提示されたのに対して、「低湿地文化論」は地方講演を中心に発表され、啓蒙的な役割しか果たせなかった。
- (22) 佐々木高明 「照葉樹林文化の道」 昭和57 日本放送出版協会 p.13
- (23) 前掲書(10) ⑥(2) p.18
- (24) 前掲書(10) ⑥(1) p.4
- (25) 前掲書(10) ⑥(1) p.5
- (26) 前掲書(10) ② p.14
- (27) 羽原又吉 「日本古代漁業経済史」 昭和24 改造社 p.267
- (28) 前掲書(6)。
- (29) 前掲書(10)。
- (30) 前掲書(10) ① p.8
- (31) 前掲書(10) ① p.8-9
- (32) 前掲書(10) ① p.7
- (33) 前掲書(10) ① p.7

- (34) 前掲書(5) p.3
- (35) 前掲書(5) p.3
- (36) 前掲書(10) ② p.17
- (37) 河岡は「低湿地文化論」の課題が「研究所の答研究会の中から生まれた」(前掲書(5) p.1)と述べている。同研究会の同人の一人辻井善弥も「農漁民」の助を著書「ある農漁民の歴史と生活」(昭和55 三一書房)の中で多用していることからして、「低湿地文化論」の主要なチームがこの研究会で盛んに論議されていたことは推測に難くない。
- (38) 渋谷敏三 「所感 昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会に」 『祭魚洞様考』 昭和29 岡書院 p.413
- (39) 前掲書(11) p.5
- (40) 前掲書(13) p.1
- (41) 渋谷敏三 「滋賀県漁業史序」 『滋賀県漁業史』 上 伊賀敏郎 編著 昭和29 p.5
- (42) 宮本常一 「海に生きる人々」 昭和39 未来社 p.42
- (43) 網野善彦 「古代・中世・近世初期の漁撈と海産物の流通」 『講座・日本技術の社会史』 2 塩業・漁業 昭和60 日本評論社 p.215
- (44) 前掲書(10)。
- (45) 河岡は前掲書(9)のp.9で「私が民具に少し近づいていったのは、『絵巻物による日本常民生活絵引』(全五巻 昭和四〇・一・四三・一)の編集手伝いをするようになってからである」と述べている。
- (46) 前掲書(9) p.12

研究ノート

「新しい社会史」を越えて

—一九八〇年代アメリカ史学における分散と統合—

川島 浩平

はじめに

一九六〇年代以降のアメリカ史学の動向として注目しているのは、「新しい社会史」(New Social History、以下ニューソーシャルヒストリーと記す)の台頭である。それ以前に有力であった解釈枠組み(コンセンサス史観の政治史及び指導者層への偏重を批判し、非政治的要素を強調し、社会底辺部を照射することに焦点を合わせた新思潮は、七〇年代には支配的パラダイムを提供するまでになった。しかし八〇年代にはいと退潮の気配を見せ、閉塞状態となり、九〇年代に入った今日、アメリカの学会において、ニューソーシャルヒストリーの名はノスタルジアの響きなくして語られなくなった。

以上のような経過を踏まえ、本稿は八〇年代にニューソーシャルヒストリーの行き詰まりに反応する形でなされたいくつかの興味深い提言に注目する。これらの提言がニューソーシャルヒストリーに代わる新たなパラダイムを供じえるか否か現時点では定かではない。が、九〇年代のアメリカ史学の動向を占う上で意義深い示唆に富むことは間違いないように思われる。

ニューソーシャルヒストリーというパラダイムが広範な専攻分野を包含することはよく知られているが、本稿では、特に、独自の専攻分野として発達してきた「新しい労働史」(ニューレイバーヒストリー)及び「新しい女性史」の二者も射程に置きつつ論を進めることにする。⁽¹⁾

Les Résumés

A Revision of the Dependency Theory in the Historiography of 19th Century Latin America

—the consolidation of an autonomous politico-economic system in 19th Century Paraguay—

Hisatoshi TAJIMA

Dependency theorists until now have alleged that Latin America, after being discovered by Europe in the 15th Century, became dependent on it and constituted its Periphery; first on colonialist Spain and Portugal and later on the economies of capitalist States, then in expansion on a world scale.

This strict structural-deterministic conception of the relationship between capitalist countries of Europe (Center) and Latin America (Periphery), which is based on the concept of unequal economic exchange between Center and Periphery, has put so much emphasis on exogenous factors that it has led to misinterpretations and misunderstanding of the differences existing between the countries of Spanish and Luso America. The lack of consideration by scholars towards the particular characteristics of each country of region has led to incorrect evaluations of its historical development, as we see in the case of Paraguay.

The purpose of this article is, therefore, to critically review what is commonly termed the Dependency theory, taking into consideration endogenous factors of a specific region in a defined historical momentum; i.e., based on the history of Paraguay in the mid-19th Century.

Paraguay, after achieving its political independence from Spain in 1811, was able to create an autonomous socio-economic system. Between 1810-1840 Paraguay was able to establish the basis of this system, which was consolidated in the period between 1841-1870. The latter period, which can be considered to have been one of original accumulation of capital, is the subject of this study. Capital accumulation orchestrated by the Paraguayan State made it possible for Paraguay to be one of a few countries to achieve this phase of capitalist development.

This autonomous development, however, conflicted with Brazilian, Argentine and Uruguayan interests, then in expansion in La Plata river region. This conflict led to the war of the Triple Alliance which caused the destruction of the Paraguayan experience in 1870.

執筆者紹介

田島 久蔵 筑波大学大学院・南米史

横山和加子 筑波大学大学院・南米史

菅 豊 筑波大学大学院・日本民俗学

川島 浩平 ブラウン大学大学院・アメリカ史

【史境】第二十一号

一九九〇年 十月二十日発行

定価二、〇〇〇円

編集・発行 歴史人類学会◎

筑波大学 歴史・人類学系内 〒305

茨城県つくば市天王台一―一―

電話 〇二九八(五三) 四〇六七

発売 (株)日本図書センター

東京都文京区大塚三―四―一三

〒112 電話 〇三(九四七)九三三七

史境

En Marge de l'Histoire

目次

〔論文〕

- 従属論の19世紀ラテンアメリカ史解釈の再検討……………田島 久歳(1)
 -19世紀パラグアイの自立的政治・経済体制の確立の例からの視点-
- ミチョアカン地方原住民村の病院制度……………横山和加子(21)
 -16世紀スペイン領植民地における社会改革の試みとその推移-

〔研究ノート〕

- 「低湿地文化論」その可能性と課題……………菅 豊(39)
 -河岡武春の方法論とその展望について-
- 「新しい社会史」を越えて……………川島 浩平(53)
 -1980年代アメリカ史学における分散と統合-

【史境】第二十一号
 一九九〇年 十月二十日発行

定価二、〇〇〇円

編集・発行 歴史人類学会

筑波大学 歴史・人類学系内 〒305

茨城県つくば市天王台一―一

電話 〇二九八(五三)四〇六七

発売 (株)日本図書センター

東京都文京区大塚三―四―一三

〒112 電話 〇三(九四七)九三八七

21

1990. 10

歴史人類学会